

前回は幕末外交談の「まえがき」を紹介しました。「あとがき」はありませんが、本文の終わりの直前に以下の記載があります。内容は“あとがき”とも言えるものですから、ここに紹介します。532頁の9行目から535頁の4行目までを紹介します。原文の使用漢字はそのままであり、改行位置もそのままです。

(6) (5) (4) (3) (2) (1)

扱幕府柄政の末にありて、外交に關する事、余が耳目の及ぶところ、略上に陳るがごとし、而してこゝに筆を擱に臨みて一言せんと欲するものあり、他なし、幕府の外人に接せしは、余をしてこれをいはしめは、これを外交とはいふべからず、其跡につきてこれを見るに、徹頭徹尾鎖國攘夷を謀りて遂得ざるの歴史たり、

初嘉永の末、阿部閣老が柄政の際にありて、全く開國に意あるが如くなりしも、世に活眼の士乏しく、この鴻圖を翼賛すべきものなく、却てこれを沮するの族多く、閣老また責に任じて、敢て断するの勇なく、事遂に姑息に陥り、國是以て定まらず

英國公使アールコック三年在日本記事、その事を記して、曰く

千八百四十五年、英國が初て支那と戦へる以來、蘭人は世界必然の變遷を告知して、日本の耳目を開きたり、外人が日本に入るの道を準備せし、和蘭政府の公平の處置は、諸國より感謝を受けるの理あり、就中、千八百五十四年ペルリ提督が開港の功を奏したるは、蘭人豫告の力、與りて功なくんばあらず、

これ我國の國を開きしは、かの和蘭國王よりの忠告に源せしものとして、論せるものなり、されど、其實は、前にも説けるごとく、全くしかりとはいふ能はざるものなれども、理を推し勢を察すれば、自然の運此のごとくなるものを見るべし、阿部閣老が、此機を用て、其勢を制するに及ばざりしは、實に遺憾とするに足れり、而して堀田閣老が、次て其事に當るにあたりては、平生の信する所を以て、一切開國の規模を定め、朝廷に啓沃して、以て我國をして萬國と并立し、其交際場裏に立しめんとすの卓見あり、其議論の正大公明なるは、天晴濟時の良相といふべしといへども、勢の不可なる、左支右吾以て其志を達するを得る能はず、これに次て、井伊閣老あり、亦時勢外交の已を得ざるを

(13) (12) (11) (10) (9) (8) (7) (6)

知るものゝことくなれども、其政畧は、専ら幕府の威權を復せんとするにありて、其外交に於る、寧ろこれを第二にをくの状あり、加之、條約の勅許を請ふの際、一時の姑息よりして、鎖攘の約を朝廷に結び、後來幕府外政上、困難の禍胎となるを致せり、これよりの後、安藤閣老のときは、其天資の聡明と、應變の機智に富めるより、外交上やゝ見るべきものあるかことしといへども、畢竟井伊元老の後を承けて、かの鎖攘の息攘を奈何とするも能はず、剩へ、和宮降嫁の事よりして、鎖攘の預約、益固く朝廷との間に結ばれたるを見る、ここに於て、幕府の困厄彌甚だしを生せり、これよりその後、幕府は朝廷の譴責と浪士の横議との制せられ、首を畏れ尾を畏れ、外国と朝廷との間に介して、彷徨行ところを知らず、其志す所は如何の所にあるやを知らずといへども、其圖る所行ふところ、一として鎖攘をなし遂げ、以て朝意を達せんとするにあらざるはなし、されば、春嶽老公の如きは、其藩論は開國にありと稱し、然も奏論する所も、其意に外ならざるか如しといへども、當時其施政上、云爲に著るゝもの、一として鎖攘の手段ならざるなし、板倉閣老にいたりては、其誠懇忠純の質、太平の宰相としては不足なしといへども、同じく朝意に承順することのみに力めて、朝意を回するの慮なきものゝことし、松平總裁のときは、やゝ氣魄あり尋常執務輩にあらざるといへども時勢を識るの見なく殆どまたかの浪士輩に傀儡使されたるものにして、決して濟世の器ならず、中間小笠原、阿部、豊後守、松前閣老のときは、頗る開國の主義を持し、外交の外交たる所以を知るものゝこときも、また時勢の沮する所、前憲後跋、その志を遂る事を得ず、末年やゝその方を得るに及びし時は、既に幕府運去の秋にあり、故に安政已來慶應の末にるまでを通觀し、其事實に顯るゝものを鑒みて予は断じていはんとす、幕府には外交のことなしたゝ朝意を奉し鎖攘をはかりて遂ざる跡のみと。

この文章自体が田邊太一のつぶやきです。行間を読んでこの「つぶやき」の真意を紹介しましょう。書き出しの先頭に付いている数字は、本文の枠の上に付いている数字に同じです。この数字によって引用箇所を明確にしました。

(1) 扱幕府柄政の末にありて、外交に関する事、余耳目がの及ぶところ、略上に陳るがごとし、而してこゝに筆を擱に臨みて一言せんと欲するものあり、他なし、幕府の外人に接せしは、余をしてこれをいはいはしめは、これを外交とはいふべからず、其跡につきてこれを見るに、徹頭徹尾鎖國攘夷を謀りて遂得ざるの歴史たり、

幕府外交の生き字引である私が見聞きしたことはおよそ以上のようなものである。誇張や捏造はせず、ありのままを紹介した。これですっきりした。終わりに当たって言わせてもらおう。幕府外交は、外交と呼べるものではなかった。海に向こうの外国人よりも京都におられる天皇の御意向を尊重し、鎖國攘夷を図って、それが出来なかった悲しい歴史であった。

(2) 初嘉永の末、阿部閣老が柄政の際にありて、全く開國に意あるが如くなりしも、世に活眼の士乏しく、この鴻圖を翼賛すべきものなく、却てこれを沮するの族多く、閣老また責に任じて、敢て断するの勇なく、事遂に姑息に陥り、國是以て定まらず

1853(嘉永6)年ペリーが初回来航した際、老中筆頭阿部正弘は“開國”の必要性を感じていたようだが、他の幕閣には阿部の意見を支えるような見識のある人物がいなかった。それどころか、“鎖國”継続を主張するものが多かった。阿部は敢えて開國を推進するような勇気がなかった。だから姑息に流れ、因習を尊んでしまった。開國富國の大きなチャンス逃がした。

(3) 英國公使アールコック三年在日本記事中、その事を記して、曰く千八百四十五年、英國が初て支那と戦へる以來、蘭人は世界必然の變遷を告知して、日本の耳目を開きたり、外人が日本に入るの道を準備せし、和蘭政府の公平の處置は、諸國より感謝を受るの理あり、就中、千八百五十四年ペルリ提督が開港の功を奏したるは、蘭人豫告の力、與りて功なくんばあらず

駐日英国公使は「日本三年在住記」の中で言う。曰く「オランダ政府は、『アヘン戦争の二の舞にならないように』と日本に1年も前から繰り返し忠告した。日本においてオランダ以外の欧米列強国が活動する道を開いたことは、列強の一員として感謝している。オランダのお蔭でペリーは日本を開國させることができた。オランダ政府に感謝しても感謝し足りない」と。

(4) これ我國の國を開きしは、かの和蘭國王よりの忠告に源せしものとして、論せるものなり、されど、其實は、前にも説けるごどく、全くしかりとはいふ能はざるものなれども、理を推し勢を察すれば、自然の運此のごとくなるものを見るべし、

アールコックは、オランダ忠告のお蔭で日本は開國できたといっている。しかしこれは少し言いすぎであろう。日本の開國は時流に逆らうことのできない処置だった。即ち開國そのものはオランダ政府の通告がなくてもやっていた。それにしてもペリー来航を1年も前に通告してくれたにも拘わらず、情報を活かし切れなかった阿部正弘の無策を嘆く。練言になるが。

(5) 而して堀田閣老が 次て其事に當るにあたりては、平生の信する所を以て、一切開國の規模を定め、朝廷に啓沃して、以て我國をして萬國と并立し、其交際場裏に立しめんと卓見あり、其議論の正大公明なるは、天晴濟時の良相といふべしといへども、勢の不可なる、左支右吾以て其志を達するを得る能はず、

阿部の死去に伴い佐倉藩主堀田正睦が老中筆頭になった。彼には期待したが、時すでに遅かった。堀田は開國の規模をさだめて天皇を説得し、開國によって列強と正々堂々と競争しようと考えた。これは勘定奉行小栗上野介が考えた路線である。惜しむらくは、無策な阿部正弘が天皇に「どうしましょうか」とお伺いを立てた後だった。すでに流れが変わっていた。

(6)これに次で、井伊閣老あり、亦時勢外交の已を得ざるを知るものゝことくなれども、其政畧は、専ら幕府の威權を復せんとするにありて、其外交に於る、寧ろこれを第二にをくの状あり、加之、條約の勅許を請ふの際、一時の姑息よりして、鎖攘の約を朝廷に結び、後來幕府外政上、困難の禍胎となるを致せり

堀田の次に彦根藩主井伊直弼が大老として幕閣トップになった。時勢は「開国やむなし」であることは理解したようであるが、井伊の関心事は「幕府權威の回復」であり、外交は二の次になってしまった。それだけではない。朝廷に対して条約の許しを得る際、その場しのぎの策として鎖国攘夷を約束してしまった。これが禍根の種。時勢からできる訳がない。

(7)これよりの後、安藤閣老のときは、其天資の聡明と、應變の機智に富めるより、外交上やゝ見るべきものあるかことしといへとも、畢竟井伊元老の後を承けて、かの鎖攘の息攘を奈何とするも能はず、剩へ、和宮降嫁の事よりして、鎖攘の預約、益固く朝廷との間に結ばれたるを見る、

井伊の後の幕閣トップは老中對馬守安藤信正だった。安藤は生まれつき聡明であり、臨機応變の心得をもっていたので外交上少しは見るべきものがあつたが、井伊が天皇に約束した鎖国攘夷の縛りはどうすることもできなかった。その上に天皇の妹、和宮の將軍家への嫁入りを迎えて、益々天皇の御希望、鎖国攘夷を硬く約束する羽目に陥ってしまった。見ていて苦しい。

(8)ここに於て、幕府の困厄彌甚だしを生せり、これよりその後、幕府は朝廷の譴責と浪士の横議との制せられ、首を畏れ尾を畏れ、外国と朝廷との間に介して、彷徨行ところを知らず、其志す所は如何の所にあるやを知らずといへとも、其圖る所行ふところ、一として鎖攘をなし遂げ、以て朝意を達せんとするにあらざるはなし、

外国から受ける開国圧力と、天皇から受ける攘夷との板ばさみになった幕府は哀れだった。幕府は薩長の策略によって右往左往させられ、何にか知らねど恐れおののき、外国と天皇との間をうろうろと彷徨い、行ったことは結局、鎖国攘夷を成し遂げて天皇の御意志に沿おうという政策になってしまった。自分で自分のやっていることが分からなくなってしまったのだ。

(9)されば、春嶽老公の如きは、其藩論は開国にありと稱し、然も奏論する所も、其意に外ならざるか如しといへとも、當時其施政上、云爲に著るゝもの、一として鎖攘の手段ならざるなし、

やっていることが分からなくなった好例は越前藩主松平春嶽である。言っていることとやっていることが違う。自藩の藩士の総意は”開国“にあるといい、自ら開国を主張していたのに、やったことは鎖国攘夷だった。つまり幕府側の人間でありながら、薩長の味方をした。本人がそのことに気がついていなかったのが嘆かわしい。賢公の名が惜しまれる。已ぬる哉。

(10)板倉閣老にいたりては、其誠懇忠純の質、太平の宰相としては不足なしといへとも、同じく朝意に承順することのみ力めて、朝意を回するの慮なきものゝごとし

安政の大獄に反対して井伊に罷免された備中松山藩主板倉勝静は、井伊の死後老中に復帰したが、もっとひどい。本人の資質は極めて高かったが、外国が攻めてくるという時期には通用しなかった。天皇の御意志に従うことばかり考え、御意志を変えていただくような工作はできなかった。太平の世ならば、祖父松平定信に負けない善性を敷いたであらうに。資質を惜しむ。

(11) 松平總裁のときは、やゝ気魄あり尋常執袴輩にあらずといへとも時勢を識るの見なく殆とまたかの浪士輩に傀儡使されたるものにして、決して濟世の器ならず、

川越藩主松平直克政治総裁は、気骨のある人物で“お坊ちゃん”ではなかったが、時の流れを見る目がなかった。幕府にチャンスがあるという洞察力にとぼしく、薩長に“いように”利用されてしまった。このような無能者を政治総裁に据えなければなかった幕府上層部のお粗末さを嘆く。太平に慣れた幕府上層部の人材不足が薩長による明治武力革命をまねいたのだ。

(12) 中間小笠原、阿部、(豊後守)松前閣老のときは、頗る開国の主義を持し、外交の外交たる所以を知るものゝごときも、また時勢の沮する所、前寔後跋、その志を遂る事を得ず、末年やゝその方を得るに及ひし時は、既に幕府運去の秋にあり、

老中を任命された唐津藩主小笠原老岐守長行、白川藩主阿部豊後守正外、蝦夷松前藩主松前伊豆守崇広等は、開国の必要性を知り、外交の“何たるか”を知っていたようであるが、残念ながら歴史舞台への登場が遅かった。すでに薩長の目論む方向に政治は動いていた。幕府上層部には薩摩の大久保のような策士がいなかった。小栗上野介の出番が遅すぎた。なかった。

(13) 故に安政已來慶應の末にるまでを通觀し其事實に顯るゝものを鑒みて予は断じていはんとす、幕府には外交のことなしたゝ朝意を奉し鎖攘をはかりて遂さる跡のみと

ペリー来航以来、幕末に至るまでを通して見ると、私は幕府上層部を弾劾する。幕府上層部には外交を語る資格はない。天皇の御意向に沿って、なるほどその御意向は薩長が誘導したものであったが、外国人を打ち払って鎖国を継続しようとなつて努力をし、悲しいことにはその努力が報われなかった軌跡だけが残ったと。これを言つて気分がさっぱりした。まことに爽快である。

つぶやき (3) の完